

写真展

古都鎌倉へのまなざし

記録集

鎌倉市中央図書館近代史資料室

写真展

2011年は鎌倉図書館100周年です

古都鎌倉へのまなざし

鎌倉市中央図書館収蔵写真より



日時：11月20日（火）～11月25日（日）

午前10時～午後6時まで（最終日は午後3時まで）

場所：鎌倉生涯学習センター（きらら鎌倉）地下ギャラリー（JR鎌倉駅前）

古い写真は、私たちに豊富な情報を運んでくれます。観光地、保養地として開けた鎌倉も時代とともに、さまざまな表情を見せてきました。カメラマンの深く温かいまなざしがとらえた風景や人物の写真は、過去からの贈りものです。今回はこれまでに中央図書館近代史資料室で収集してきた写真を展示し、移り変わる鎌倉の姿を紹介します。



■安田三郎(故・鎌倉国宝館カメラマン)撮影写真より

鎌倉 み仏へのいざない/古都鎌倉へのまなざしー自然と文化財保存のために

鎌倉文士の肖像/この人この頃(「月刊鎌倉市民」より) *画像検索コーナーもあります

■中央図書館収蔵写真より 寄贈していただいた写真を中心に年代とテーマに沿って

海浜の風景/谷戸・道・川/町並み/駅/段葛/海浜ホテル/別荘/震災/祭/消防/戦時中

鎌倉カーニバル/宅地造成/仕事と生活の一コマ/子どもたち/その他

主催：鎌倉市中央図書館(近代史資料室)

協力：安田三郎写真を保存する会 鎌倉国宝館

お問い合わせ TEL 0467-25-2611(鎌倉市中央図書館)

(2007年11月 写真展チラシ)

目次

ごあいさつ.....	1
安田三郎撮影写真より.....	2
写真 空から.....	3, 4
写真 駅.....	5
写真 海岸.....	6, 7, 8
写真 風景.....	9, 10, 11
写真 寺社・やぐら.....	12, 13, 14
写真 祭.....	15, 16, 17
写真 開発・宅地造成.....	18, 19
写真 人物・鎌倉文士.....	20～27
写真 仏像・彫刻	28, 29, 30
写真展会場風景.....	31～35
「安田写真を保存する会」活動風景	36, 37
感想いろいろ.....	38～44
終わりに.....	45, 46

ごあいさつ

写真展「古都鎌倉へのまなざしー鎌倉市中央図書館所蔵写真より」によせて

鎌倉市中央図書館では、市民の皆様からご提供いただいた数多くの写真を、貴重な図書館資料として保存しております。

古い写真は、私たちに豊富な情報を運んでくれます。カメラマンの深く温かいまなざしがとらえた風景や人物の写真は過去からの贈り物です。今回はこの保存写真の中から約400点を展示し、移り変わる鎌倉の姿を紹介いたします。

この会場の半分を占めている写真は、故安田三郎氏撮影のものです。今から7年前に約15,000コマのネガフィルムを、ご遺族からご寄贈いただき、ボランティアグループ「安田三郎写真を保存する会」の協力で長年にわたり整理してきました。

また、会場の半分を占めるその他の写真は、約200人の方々から、思い出の写真をご寄贈いただいたものです。

展示に際して、仏像写真の展示をご承諾いただいた寺院各位、ネガ所蔵者である鎌倉国宝館、写真の複製を担当してくださった元鎌倉国宝館カメラマン山田武二氏、肖像写真の展示をご承諾くださったご遺族、関係者の方々に厚く御礼申しあげます。

そしてこの展示開催のため、準備にご尽力くださった「安田写真を保存する会」及び「CPCの会」（湘南鎌倉生涯現役の会）、「鎌倉を愛する会」の皆様方に心より感謝いたします。

平成19年11月20日
鎌倉市中央図書館

(展示会場「ごあいさつ」)より

安田三郎撮影写真より

写真家安田三郎は自然と歴史をこよなく愛し、昭和30年代から急激に変わりつつある鎌倉の風景をカメラに収め続けました。

いつも現場に足を運び、その美しさと失われ行く姿を多くの人々に伝えようとしてしました。

また、鎌倉国宝館の嘱託カメラマンとして、寺院の仏像や建物、石仏など数多くの写真を撮影しました。自らの心の目をとおしてみ仏の形をとらえようと精進した人です。

現在安田氏の残した膨大な写真は、鎌倉市中央図書館に寄贈され、ボランティアグループ「安田三郎写真を保存する会」の協力を得て整理されています。今回はその中からおもな写真をご紹介します。失われた風景、先人たちの熱い思いなどを写真の中に見つけていただければ幸いです。



安田三郎氏

安田三郎氏略歴

1919年東京神田で生まれる。

写真科学を専攻し、富士写真フィルム勤務。

1950年から1980年まで鎌倉国宝館勤務。

文化財の調査、資料整備に従事。

2002年6月6日没。

おもな著作

『鎌倉 み仏へのいざない』(アルファ社)

『鎌倉歴史散策』(保育社)

『文化財の見方』(保育社)

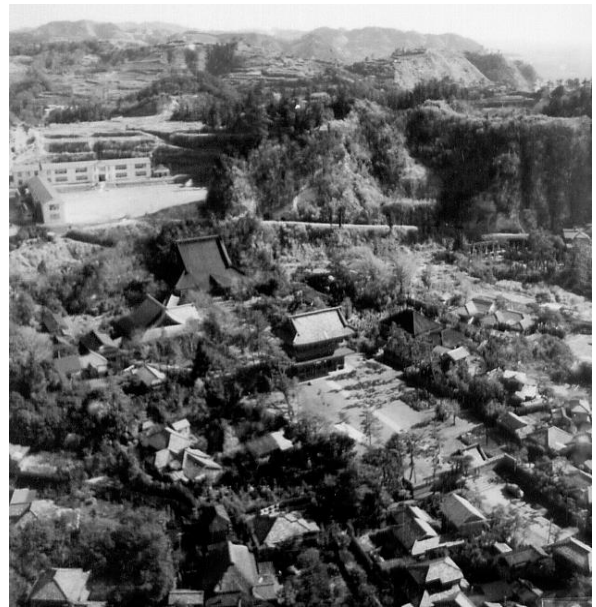
空から



和賀江島

昭和29年7月1日撮影

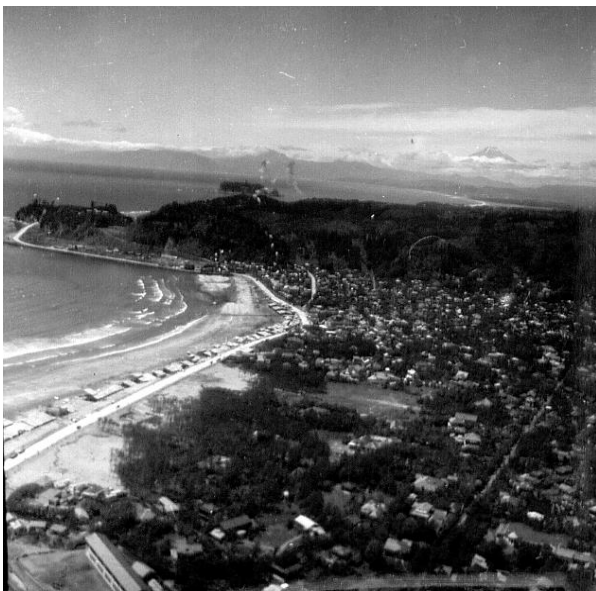
現存する日本最古の築港跡。今は丸い石が散在しているが、江戸時代までは村人達が石組みを修繕して使い、港の機能を果たしていた。海岸の崖沿いには、鎌倉と小坪をつなぐ生活道路があった。



光明寺・一中・住吉城址

昭和29年7月1日撮影

材木座光明寺上空から逗子方面の山並みを見渡す雄大な景色。昭和26年に竣工した第一中学校の校舎とその右手に住吉城址の丘陵が見える。



空から見た由比ヶ浜海岸

昭和29年7月1日撮影

写真中央部で広場になっているのが昭和20年冬に焼失した「海浜ホテル」跡。浜辺には坂ノ下海岸まで海の家が立ち並ぶ。後方は江ノ島と富士山。



まっすぐ海へ向う若宮大路 昭和29年7月1日撮影
 鶴岡八幡宮の北に位置する御谷（おやつ）上空から、南方の鎌倉市街地を望む。左手前に第二中学校舎、右手前には御谷発掘調査地が見える。



散在ヶ池（鎌倉湖） 昭和29年7月1日撮影
 江戸時代末から明治初期にかけてできた灌漑用の溜池。写真の左下方に小さな棚田のような水田が見える。現在、池の周辺を除いて、森林はすべて住宅に置きかわり、今泉信販団地となっている。

駅

北鎌倉駅 昭和34年夏撮影
夏だけの季節停車場として昭和2年に開設され、昭和5年に常設駅に昇格した。円覚寺の山を背景にのどかな空気を感じる素朴な駅舎である。



鎌倉駅夕景（東口） 昭和37年7月撮影
夕方、降車口改札を出て家路に急ぐ人々。改札の入口と出口が別々だった。



鎌倉駅 整列乗車 昭和38年5月撮影
整列して上りの増結車を待つ人々。北鎌倉方面のホームには屋根がなく、山の緑がよく見渡せた。



鎌倉駅プラットホーム 昭和33年2月撮影
上り電車が入ってきた。2等車は今のグリーン車。「土地がら2等通勤者が多い、悠々と列んでいる。」と「アサヒ写真ブックNo.67」に掲載された。



逗子駅プラットホーム 昭和36年2月撮影
下り電車を待つ外国人の女性。当時は葉山などに駐留軍将校の住宅があった。
うしろの跨線橋は、本年9月に撤去された。古い陸橋は、1899年(明治32年)に製造され、「関東・東北で最古の可能性が高い」といわれ、逗子では近代化遺産として保存を検討中と新聞では報じている。(2007.10. 21 読売新聞)



海岸



モリソン屋敷（異人屋敷） 昭和37年撮影
漁具小舎（苦屋）と西洋館（モリソン屋敷）。モリソン屋敷は、古く明治35年にイギリスの貿易商モリソンが材木座5丁目の広大な砂丘上に西洋館を建て、洋風の貸家を営んだことに始まる。高い屋根は漁船が海からの目印にしたという。



盛夏の由比ヶ浜海岸 昭和37年7月撮影
材木座海岸より由比ヶ浜、坂ノ下を遠望。ゴムボート、貸浮輪全盛時代。



若宮大路、一の鳥居付近 撮影年月日不詳
歩道に砂利道、松の並木がまだ残っている。海水浴を終えて、海浜着にゴム草履の娘さんたち。「鎌倉市民」昭和41年7月号表紙に掲載。



由比ヶ浜は「夢の渚」 昭和37年7月15日撮影
由比ヶ浜より湘南道路に向って。ステテコに下駄ばき姿。

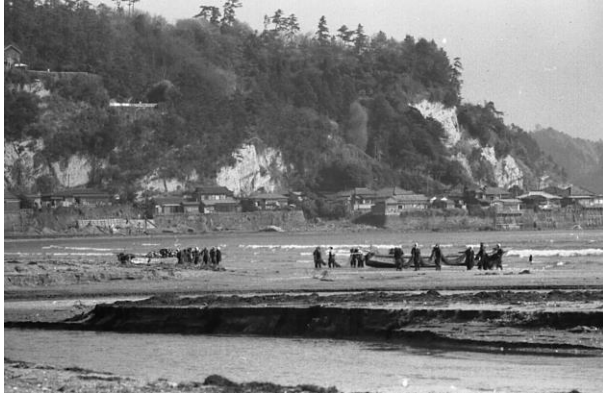


江ノ島 昭和23年11月26日撮影
七里ヶ浜より江ノ島を望む。まるで太古の江ノ島の姿を見るようである。「平和塔」の名で展望塔が建ったのは、昭和26年3月であった。

滑川河口の仮橋

昭和25年頃撮影

引き潮時の滑川河口風景。由比ヶ浜と材木座を結んだ木橋で、満潮時には、橋ぎりぎりまで海水が来た。中央は、ハゼ釣りの子供たち。海岸橋上流に堰が出来る前は、ハゼ釣りの名所で、河口では投網でボラを獲る人もよく見かけた。



材木座の漁師たち

昭和36年撮影

鎌倉海岸の原風景。中央奥の岩上に和賀江島の碑が見える。手前の水面は、豆腐川から海へ押し出している流れである。



七里ガ浜のドライブウェイ 昭和33年2月22日撮影
稲村ヶ崎切通しを走る「クラウン」。昭和31年に開通した湘南有料道路。



台風襲来

昭和44年8月23日撮影

湘南有料道路に打寄せる台風9号の波。坂ノ下あたり。



湘南有料道路料金徴収所

昭和41年2月13日撮影

昭和31年7月1日に開通した湘南有料道路（片瀬・鎌倉間）の料金徴収所は七里ガ浜にあった。開通した直後から有料撤廃の運動がおこり、市議会も撤廃を決議したが、実際に七里ヶ浜のゲートが撤去されたのは昭和50年であった。



坂ノ下海岸のシラス干し作り

昭和41年5月20日
撮影当時は、2月のノリ漁、3月のコンブ漁、
5月のわかめ漁、シラス干しと海の幸を相
手に厳しい作業が続いた。



ぼくも見たいな 昭和33年1月撮影
小坪の浜にやって来た紙芝居。



猫も一緒に紙芝居 昭和31年1月撮影
小坪海岸。



小坪に続く飯島道

昭和43年5月撮影
正面が稲村ヶ崎。その左が江ノ島。左横の岩場は、満潮になると
水面下となる。この道沿いに庚申塔などがたくさん並び、村境で
あったことを示していた。

風景



六地藏前 昭和30年3月撮影
鎌倉時代の刑場跡といわれた場所の近くに、六地藏が静かに立っている。江ノ電バスの通るにぎやかな由比ガ浜通りには、戦後の名残りの英字看板が目立つ。



由比ヶ浜大通り 昭和45年7月20日撮影
鎌倉信用金庫（現湘南信金）屋上より六地藏・長谷方面を望む。左上の八角屋根はハリス記念鎌倉幼稚園。



土蔵のある風景 昭和39年5月22日撮影
海岸通りバス停で時刻表を確認する女性。



附属小児童の下校風景（段葛）
昭和40年1月撮影
林立している電信柱。このアングルからの撮影はめずらしい。



雪の日、托鉢に出る雲水たち

昭和40年1月6日撮影

雪中、脚絆わらじに網代笠、厳しい修行の一端。巨福呂坂を風のように通り過ぎていく雲水の一行。



山ノ内に散在した茅葺の家々

昭和38年2月27日撮影

写真中央後方には円覚寺門前の杉並木が見える。



円覚寺門前の杉並木

昭和34年撮影

年月を経た杉は今にも倒れそうであるが、鎌倉へ入る門のような風情があった。ボンネットトラックに続いて国産高級乗用車クラウンが走る。



茅葺の家並みが続く十二所

昭和32年撮影

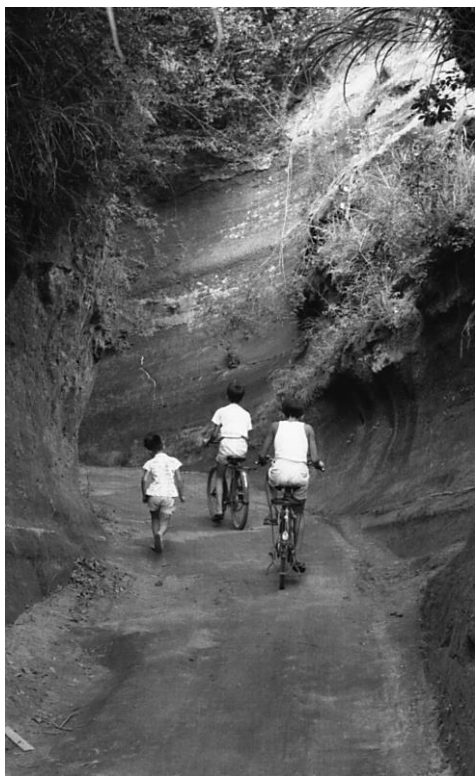
ここから朝夷奈峠を抜け、金沢八景へ通じる古道がある。失業対策事業で工事が進められていた県道は、昭和32年11月に開通した。村の道路はジャリ道で、自動車よりリヤカーが主力運搬手段だった。



鎌倉山を下るボンネットバス

昭和30年頃撮影

鎌倉山の住宅地（別荘地）は、昭和5年から開発が始まった。同時に大船から鎌倉山を通過して片瀬に通じる日本最初の自動車専用道路が開通した。



山崎切通し 昭和37年頃撮影
山崎の倉久保谷戸と台神明神社の裏山の間にS字に開削された切通しがあった。木洩れ日の下を通ると薄緑色の深い水の底にいるような気分だったと書いた人がある。谷戸奥に窯場を築いた北大路魯山人によって臥龍峡と名づけられた。こどもたちは山崎から台方面に向っている。



消防署から見た段葛 昭和39年4月11日撮影
当時の消防署は現在のスーパー・ユニオンの場所にあった。中央に見えるのは雪ノ下カトリック教会。



大船の町 昭和44年10月1日撮影
水道山から大船観音を望む。湘南モノレールはまだ工事中。昭和45年3月に大船ー西鎌倉間が全国初の通勤用モノレールとして開通した。



野菜出荷風景 昭和34年撮影
関谷の農家から野菜の出荷。竹籠に山のように積まれたキャベツが荷台に運び上げられる。オート三輪が大活躍。



大仏坂トンネル 昭和32年撮影
明治末に開通した大仏坂トンネルの脇に、もう一本のトンネル工事が進んでいる。

寺社・やぐら



鶴岡八幡宮本殿 昭和28年秋撮影
大臣山から見た鶴岡八幡宮本殿の瓦葺き屋根のはるか向うに鎌倉の町が見える。文政年間に再建された建物は今、平成の大修理を終えたところである。



東慶寺 昭和33年2月撮影
東慶寺裏の竹林と畑。竹林の中の階段は「松ヶ岡文庫」へ通じている。



源氏池雪景 昭和42年2月11日撮影
この日、首都圏を襲った大雪はあたりを銀世界に変えた。



雪の瑞泉寺 昭和40年1月撮影
地藏堂の屋根を見おろす。雪の中、よく目を凝らすと、お堂の前でカメラを構えている人物が見える。



雪の覚園寺薬師堂 昭和42年2月11日撮影
唐様（からよう）の仏殿が雪にすっぽりと埋まっている。ここは北条義時が厚く信仰した薬師が祀られていたので薬師堂ヶ谷といわれ、永仁4年（1296年）北条貞時が願主となり覚園寺となる。後に足利尊氏の帰依も受け勅願寺に昇格する。



帰源院建物解体前

昭和45年撮影

帰源院は円覚寺塔頭のひとつ。明治27年暮れから約10日間、夏目漱石が止宿参禅し、後の小説「門」にも情景がよく描写されている。今では「漱石ゆかりの寺」として句碑がある。



英勝寺山門

昭和48年6月撮影

小町、東勝寺橋の南東部に建っていた時の写真。現在は、解体され、英勝寺に戻ってきて再建を待っている。



十二所神社前のお地藏さん

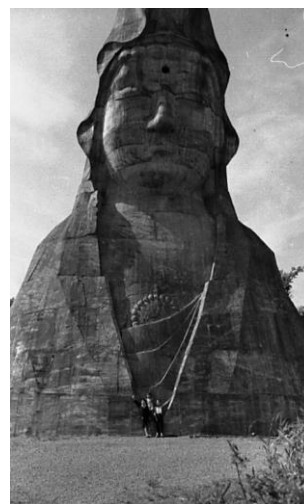
昭和30年代撮影

江戸時代に、このあたりで巡礼の女が不慮の死をとげ、以来土地の人が供養していると言い伝えられている。風化が激しいがいつも赤い前掛けやお花が手向けられている。今日も交通量の多い金沢街道脇に立っている。



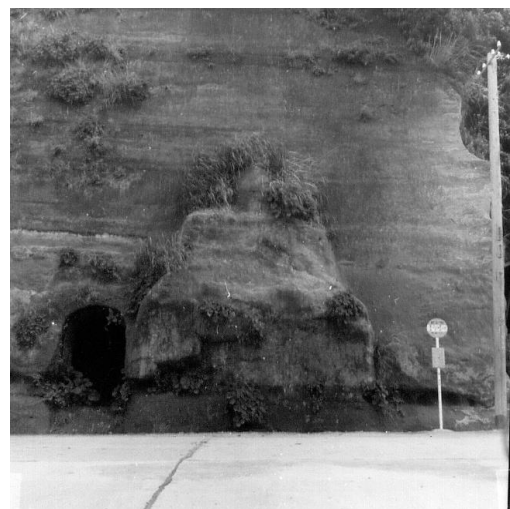
寿福寺参道

昭和41年4月22日撮影
鎌倉五山のうち第3位の寿福寺は、源頼朝が没した年の翌正治2年(1200年)北条政子が榮西を招いて創建した。禅寺らしい象徴的な石だたみの参道。



大船観音

昭和29年頃撮影
昭和4年に着工された観音像は昭和9年から32年までの長い中断期間があった。放置された黒っぽい観音像の前が撮影会の場所選ばれた。現在の白く美しい観音像は多くの人の努力が実り、昭和35年5月に完成した。



鼻欠地藏

昭和32年6月撮影

相模と武蔵の国境にあり、堺(さかい)地藏と呼ばれ、またの名を鼻欠け地藏という。『江戸名所図会』などにも挿絵入りで紹介されている。金沢と大船を結ぶ道路拡張工事で膝が削られたうえ、今では風化してそれとわかりにくい。



見つかったやぐら 昭和45年8月撮影
 銭洗弁天参道工事で発見されたやぐら群。やぐらの
 まま土に覆われていた五輪塔や板碑が、長い眠
 りから覚めるかのように、たくさん顔を出した。



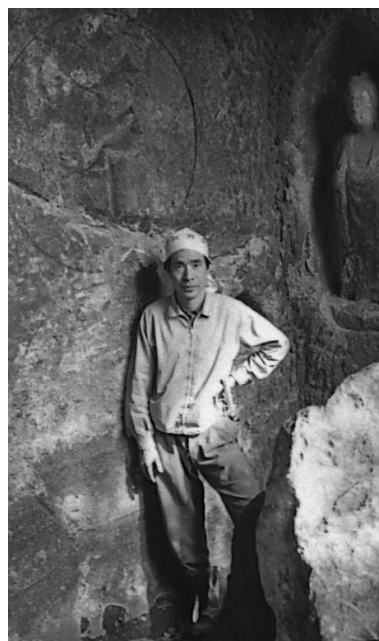
お塔の窪やぐら 昭和40年10月撮影
 お塔の窪は十二所番場ヶ谷奥の谷にあるやぐら。
 18基の宝篋印塔（靱塔）の存在が確認されている
 が、鎌倉最古といわれる古い様式の一石造の宝篋
 印塔が壁際に並んでいる。



まんだら堂跡 昭和43年4月撮影
 名越まんだら堂の跡。階段状のやぐら群とおび
 ただしい五輪塔。今はこのような情景を見るこ
 とができない。かつてはホテルも飛んでいた。



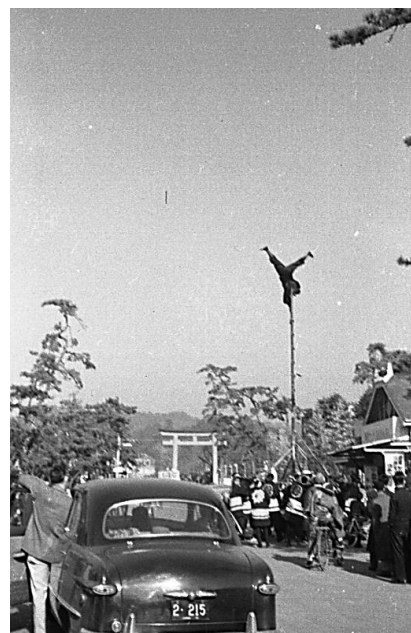
発掘調査 昭和39年3月撮影
 百八やぐらを調査中の若き日の
 鎌倉国宝館館長三浦勝男氏（上）
 と安田三郎氏（下）。



祭



初詣 昭和20年代撮影
八幡宮たいこ橋の振袖娘二人。うまく渡り終えて、思わず笑いが。当時はみんなこぞってよじ登ったものだ。



出初め式 昭和26年1月撮影
若宮大路交差点付近から二の鳥居を眺む。今の生涯学習センター付近か。



左義長に集まる子供達 38年1月15日撮影
鶴岡八幡宮の左義長。「どんどやき」の名で親しまれている。鶴岡幼稚園の横の広場で行われ、終わるとみかんがもらえる。



鶴岡八幡宮ぼんぼり祭

昭和36年8月9日撮影
夏越祭、立秋祭、実朝忌と続く三日間、雪洞のともしびに浮かぶ著名人の書画を楽しむ。今は人気を呼んで人出が多いが、この時代は静かに見られた。



鶴岡八幡宮やぶさめ 昭和33年撮影
安田三郎の代表作品のひとつ。



薪能 昭和47年9月21日撮影
鎌倉宮境内において。鎌倉薪能は昭和34年に始められ、今年（平成19年）で49回目を迎えた。



鶴岡八幡宮例祭（神幸祭）

昭和33年9月15日撮影
白丁が重たい神輿をゆっくりかついで練り歩くさまは今も昔も変わらない。たいこ橋の上から見物する人々もいた。



面掛行列 昭和33年頃撮影
坂ノ下御霊神社例祭の神輿渡御に供奉して面掛衆10人が出る。毎年9月18日に坂ノ下の人達はその役を勤め、多くの見物客を集めている。



六地藏付近を進む鎌倉カーニバル

昭和26年撮影

久米正雄氏（左）と草間時光市長（右）。久米氏最後のカーニバルとなる。各会社がスポンサーとなり、はりこなどを作りPR。カーニバルも最高潮の頃である。



鎌倉カーニバル

昭和26年撮影

オート三輪がタクシーに使われていた。それが「指揮車」として活躍している。



鎌倉カーニバル

昭和26年撮影

横須賀線ガードから下を見る。今では上れない地点からカメラをかまえる人が多かったようだ。若宮大路を海方向へ進む車列。戦後のヤミ市がまだ残っている。

開発・宅地造成



宅地造成 昭和40年10月3日撮影
 広大な今泉信販団地の宅地造成現場。
 この頃より、鎌倉での大規模な宅地造成が始まった。



宅地造成 昭和40年11月5日撮影
 明月院奥。現在の今泉信販団地造成現場。



宅地造成 昭和45年11月24日撮影
 冬空の下、縦横に広がってゆくトラクターの軌跡。笛田地区にて。



宅地造成 昭和40年夏撮影
 浄明寺釈迦堂ヶ谷の宅造工事現場。崩されかけたやぐら群が遠望される。宝戒寺二世普川国師入定窟の伝承のあるやぐらを中心に約50穴のやぐら群があった。



宅地造成 昭和40年6月29日撮影
 釈迦堂ヶ谷（現在の浄明寺一丁目付近）の宅地造成で放り出された五輪塔を供養する「鎌倉風致保存連盟」の会員達。五輪塔の中には鎌倉幕府が滅びた年号「元弘」の銘もあった。



宅地造成 昭和40年6月29日撮影
 釈迦堂ヶ谷。五輪塔の供養を終えて、造成で削り取られた斜面を下る「鎌倉風致保存連盟」の会員達。



宅地造成 昭和44年5月15日撮影
現在の鎌倉逗子ハイランドの宅造工事。
明石橋付近から逗子・久木方向を望む。



宅地造成 昭和41年2月12日撮影
胡桃谷における宅地造成現場。
無惨に削り取られた山肌が痛々しい。



宅地造成 昭和40年11月3日撮影
残された右側の山の高さから、削り取られた
部分の大きさが伺える。七里ガ浜にて。



宅地造成 昭和46年8月7日撮影
小坪海岸埋立造成。現在の逗子マリーナ付近。
後方の海岸線は、和賀江島から材木座、由比
ヶ浜海岸へと続く。



造成工事 昭和38年8月6日撮影
玉縄城址。建設中の建物は現在の清泉女学院。
建物の左側の丘は玉縄城諏訪壇で、これは辛
うじて今も校内に残されている。

人物・鎌倉文士



川端康成(1899～1972)

作家。1968年日本人として初のノーベル文学賞受賞。1935年以来鎌倉に居住し、浄明寺、二階堂、長谷などに住んだ。長谷の旧居はいま「川端康成記念館」となっている。



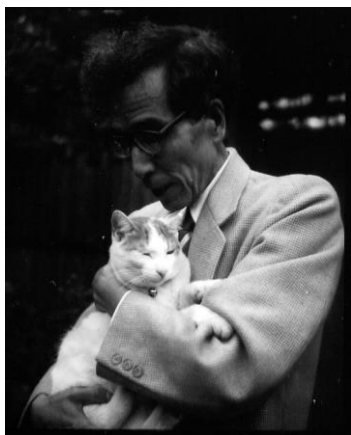
吉屋信子(1896～1973)

作家。大正末期から昭和にかけて、少女小説や大衆小説で人気を博した。戦後は伝記ものや歴史小説にも手を伸ばした。1944年長谷の別荘に疎開。1950年帰京したが、1962年から没年まで長谷（現吉屋信子記念館）に住んだ。



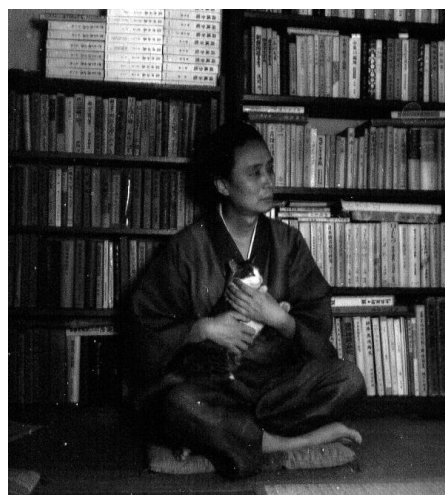
大佛次郎(1897～1973)

昭和25年2月撮影作家。『鞍馬天狗』から『パリ燃ゆ』『天皇の世紀』など、時代小説から現代小説、史伝などと幅広く活躍した。ペンネームの「大佛」は大学卒業後長谷に居住したことに因む。1929年から没年まで雪ノ下に居住。別邸は今も「大佛茶亭」として保存されている。



**村松梢風
(1889～1961)**

作家。大衆文学の中でも読み物風の人物評伝に新境地を開き、『近世名勝負物語』『本朝画人伝』などを著した。1947年から没年まで西御門に居住。作家村松友視は孫にあたる。



高見順(1907～1965)

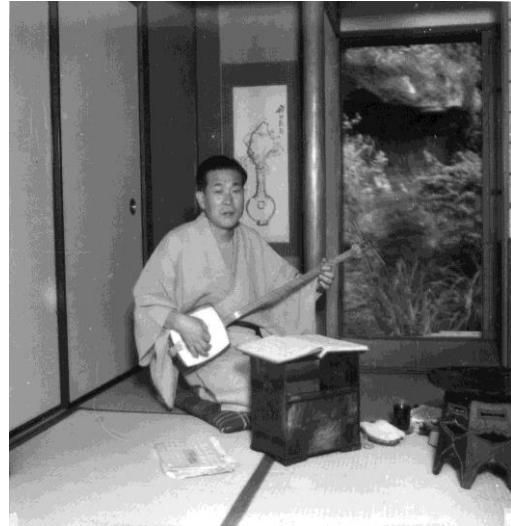
作家。詩人。1943年から山ノ内に居住し、貸本屋“鎌倉文庫”の運営には他の作家たちとともに尽力した。1941年から没年まで続けた『高見順日記』は終戦前後の記録として有名。東慶寺に眠る。



久保田万太郎(1889～1963)

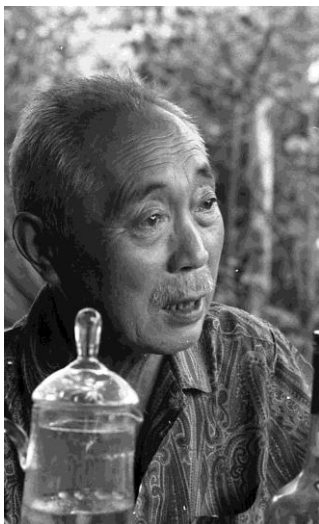
材木座海岸で撮影。

作家、俳人、劇作家、演出家と多様な顔を持ち、鎌倉には1945年から1955年まで材木座に居住し、鎌倉ペンクラブの活動に尽力した。瑞泉寺に句碑がある。



林 房雄(1903～1975)

作家。1925年、プロレタリア作家として出発したが、1935年転向。1932年より大町に住み、一時鎌倉を離れたが、1935年から没年まで浄明寺に居住した。



小牧近江

(1894～1978)

仏文学者。翻訳家。16歳で渡仏。1919年帰国し、金子洋文らと雑誌「種蒔く人」を創刊。プロレタリア文学運動の先駆的な役割を果たした。1925年から没年まで稲村ガ崎に住み、鎌倉の平和運動のシンボリック的存在となった。



今 日出海(1903～1984)

作家。評論家。初代文化庁長官。

1931年から小町、雪ノ下に住み、一時、東京に転出したが、再び雪ノ下に戻り、1951年から没年まで二階堂に居住した。今 東光の実弟。『天皇の帽子』（1950）で直木賞受賞。



久米正雄と小島政二郎

(久米1891～1952) (小島1894～1994)

昭和25年頃撮影

作家。久米正雄（左）は、鎌倉文士を中心人物で1932年から1940年鎌倉町会議員をつとめ、鎌倉カーニバルの提唱者であった。小島政二郎は久米宅に近い二階堂に住み親交があった。



横山隆一(1909～2001)

昭和41年撮影
漫画家。「フクちゃん」
の作者。昭和11年以来鎌
倉に住む。鎌倉文化人の
重要メンバーだった。
「鎌倉市民」誌に連載し
た「鎌倉ユーモア」で
は、しばしば鋭い世相風
刺が注目された。



永井路子(1929～) 昭和43年1月撮影
チャーミングな猫と一緒に。

作家。『炎環』(1964)で直木賞を受賞し、
伸びやかな視点で歴史小説を多数執筆。
長く鎌倉山に住み、安田三郎とは『鎌倉
歴史散策』(保育社1976年)の共著者と
なるなど親交があった。



井上禅定(東慶寺住職)(1911～2006)

昭和33年2月撮影
「縁切文書」を読み解く井上禅定師。
師は東慶寺住職として、鎌倉の文化財や
自然保護のために永年盡力された。先頭
に立って行動される姿は今も思い起こさ
れる。著書に『松ヶ岡東慶寺誌』『駆込
寺東慶寺史』『東慶寺と駆込女』など。



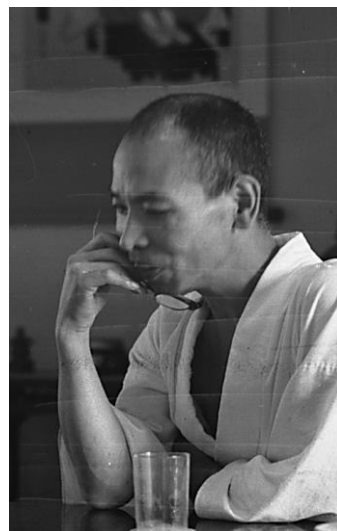
**大下豊道(瑞泉寺住職)
(1913～1986)**

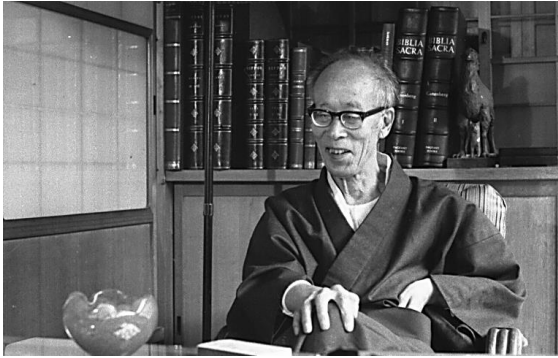
昭和39年5月撮影
戦後のお寺の復興にご
苦勞された様子は『豊道
和尚絵詞』にうかがえ
る。精進料理を出す忙し
い毎日に、ふと静かに
お点前を楽しむ。

大森順雄(覚園寺住職)(1917～1987)

昭和42年7月撮影
「古都と言われる鎌倉に、古都の佛(おもかげ)は極めて乏
しいが、覚園寺には鎌倉時代からの自然と薬師堂と仏像が
あり、更に鎌倉時代さながらの傑僧大森順雄師がいらっし
やる。大森師こそ信念の人、当代の古仏一稀な傑僧である。」
「鎌倉市民」(No.130/1970・11)より

昭和49年の十二神将本格修理まで、覚園寺復興への長い
道のりを歩んだ人である。





亀井高孝(1886～1977) 昭和42年10月撮影
歴史学者。著書に『大黒屋光太夫』ほか。
初代鎌倉市史編纂委員長としての苦労話は
『葦廬葉（いろは）の屑籠（くずかご）』
（時事通信社・1969年）にくわしい。



葛原 輝(1915～) 昭和43年11月撮影
山口県出身。絵が描きたくて自由学園に移る。清方、
秀峰などに学ぶ。伊東深水門下。日展に出品。「鎌倉市
民」誌に長年、季節の草花の絵などのカットを描いた。
現在もグループ「わらび会」を主宰し、日本画を指導。
年1回、鎌倉彫会館で展覧会を開いている。

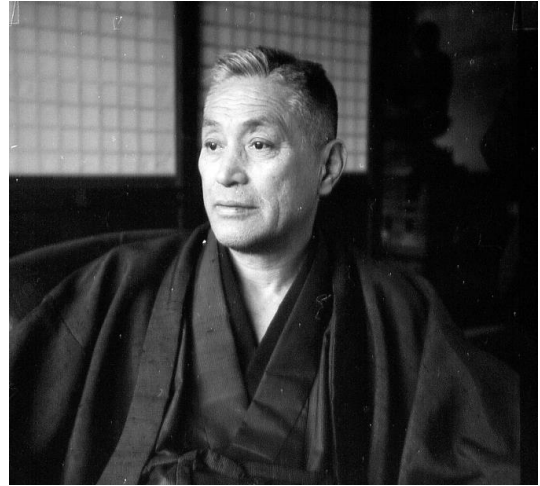


後藤俊太郎(1923～2006) 昭和42年3月撮影
鎌倉彫博古堂主人。鎌倉仏師の伝統をうけつぎ、
明治期の齋宮、運久が再興した鎌倉彫を彫刻家の
視点で新しく再生させ、さらに市民に広めた。鎌
倉彫会館建設予定地に立って、夢を語る。流行の
ベレー帽がよく似合っている。



渋江二郎(1909～1971) 昭和37年4月撮影
鎌倉国宝館にて撮影。子犬と遊ぶひととき。
昭和9年帝室博物館第一回公募研究員に採用される。
終戦直後より、鎌倉国宝館館長を勤め、現在の国宝館
の礎を築いた。現職の昭和46年に死去。趣味の絵をア
マチュア画家集団「デフォルメ会」で描き、時には小
さな仏像を彫り、酒を愛した博物館人であった。

菅原通済(1894～1981) 昭和32年3月撮影
常盤山文庫にて撮影。
鎌倉山住宅地の開発に尽力した一人。実業家の反面、風流洒脱な人として知られる。



武 基雄(1910～2005) 昭和44年6月撮影
建築家。都市計画の専門家としても知られる。仙台市公会堂(1950)、長崎水族館(1959)、長崎市公会堂(1962)などを設計し、鎌倉では1969年に鎌倉商工会議所を設計した。市民のひとりとして鎌倉のまちづくりに情熱を注ぎ、「鎌倉都市計画懇談会」でも活躍した。著書に『市民としての建築家』(1983)。



辰巳浜子(1904～1985) 昭和36年3月撮影
大佛次郎茶亭にて。利休忌茶会でのお点前。
ときおり大佛氏が通りかかり、会釈されるのもこちらならではの茶会の風情であったという。
辰巳浜子氏は料理研究家として、また鎌倉文化人の一人として活躍された。



竹腰長生(1930～)
昭和44年11月撮影
朝夷奈の切通しに近い「林麓居」に住む。囲炉裏を切った茶の間の炉端で茶を点てる真の趣味人。著書に『入門 魯山人の陶器』(1977) など。



津村秀夫(1907～1985) 昭和32年3月撮影
映画評論家。“Q”の筆名で辛口の批評が有名。鎌倉住まいも長く、映画人達の鎌倉会では川喜多夫妻や小津安二郎、田中絹代に呼びかけるなど中心的な存在であった。『新しい映画美』など著書多数。



富沢珪堂師と高見順夫人 昭和42年7月撮影
富沢珪堂師（円覚寺塔頭 帰源院住職）
若き雲水の時、漱石と文通したり、漱石宅に泊めてもらったりした。後年、帰源院の住職になった時、帰源院と漱石のゆかりを知り、境内に漱石の記念碑（句碑）を建てることを発起した。句碑は昭和37年12月9日に建立され、毎年春秋、漱石を偲ぶ会「鎌倉漱石の会」が開かれている。昭和43年に77歳で死去。



高見秋子さん（小説家・詩人高見順夫人）
長く山ノ内に住み、最後の「文士の妻」であった。高見の遺志により「詩の文学賞」として昭和45年に「高見順賞」を創設。現代詩の賞として堂々たる貫禄をそなえた賞となった。平成12年5月19日、88歳で死去。東慶寺に順と共に眠る。

那須良輔(1913～1989) 昭和44年11月撮影
自宅の庭にて。
戦後、毎日新聞紙上を中心に、政治風刺漫画を連載した。鋭い風刺の中に、ほのぼのとした人間味が感じられた。郷里の熊本市湯前に「まんが美術館」がある。著書に『鎌倉素描』など。



原 実(1901～1995) 昭和43年1月撮影
円覚寺塔頭帰源院にて。
月刊誌「鎌倉市民」（1960・1～1978・11 204号）主宰。鎌倉の自然を守る会会長。全国歴史的風土保存連盟名誉会長。古都保存法の旗手。神奈川県文化功労者。著書に『歴史的風土の保存』（アカンサス建築工房・1989）

古田紹欽(1911～2001) 昭和32年3月撮影
仏教学者鈴木大拙の膨大な資料を収める「松ヶ岡文庫」の文庫長。現代人にもわかる言葉で仏教を語った人。著書に『日本仏教思想史』『仏教と文学』『求道と風雅』『禅僧の遺偈』。編書に『鈴木大拙集』『古田紹欽集』（全14巻）など。



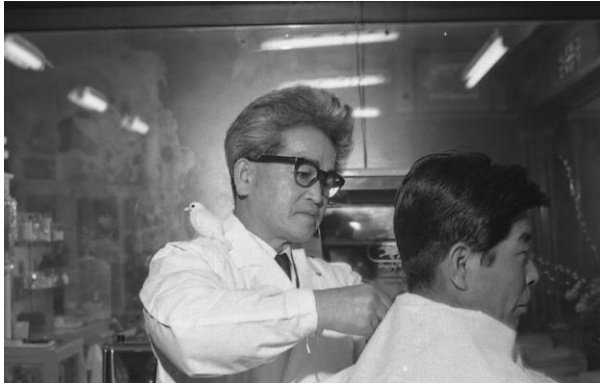
堀口大蔵(1892～1981) 昭和32年4月撮影
詩人・フランス文学者。著訳書に『月光とピエロ』『パンの笛』など。娘の堀口すみれ子さんも詩人でエッセイスト。



正木千冬(1903～1982) 昭和46年8月撮影
鎌倉の初代革新市長。首都圏の首長がそろって革新系となり“革新メガロポリス”などと呼ばれた時代。鎌倉もその例に洩れなかった。激しい宅地造成の波にさらされた鎌倉市を、市民生活重視の市政へと舵を取った。俳人。



前田幸市郎(1921～1989) 昭和42年6月撮影
イワタコーヒー店中庭で撮影。
戦後の鎌倉に音楽のいずみを作り出した人。プロ、アマが混じり合って、鎌倉合唱団、初代鎌倉交響楽団等を結成し指導した。日本各地で音楽家を育て、宗教曲の合唱指揮第一人者といわれた。真摯な指導は多くの人の心に残っている。現在も活躍する鎌倉交響楽団、グロリア少年合唱団は前田氏の指導による。



谷 正男 昭和42年1月撮影
理髪師（材木座3丁目）。本業のかたわら、老人ホームや養護施設の理髪奉仕ボランティアなどに力を尽くし表彰された。安田三郎も彼の人柄に惹かれ、ここをよく利用した。

村田良策(1895～1970) 昭和39年5月撮影
ご夫人とともに。
県立近代美術館初代館長。鎌倉の文化振興に尽力された。その精神は「村田良策記念アトリエM」（1968年開設）に引き継がれ、美術教育を中心に芸術スタジオが営まれている。



ルイス・ブッシュ(1907～1987) 昭和43年9月撮影
文筆家。1932年来日、旧制弘前、山形高校で英語を教えた。1940年英海軍士官として従軍、香港で日本軍の捕虜となり、各地の収容所を経て東京の収容所で終戦を迎えた。一時帰国したが、1946年再来日、稲村ガ崎に居を構えた。捕虜体験を綴った『おかわいそうに』（1956）のほか、『ハバカリ先生』（1961）などの著書がある。一時NHKに勤め、国際放送を担当した。鎌倉では市民や文士達と交流し、多くの人に愛された。「佛手」のサインがある。



婦人子供会館役員 昭和44年4月撮影
婦人子供会館増改築完成披露の日。日比谷より理事長（前列中央）を囲んで。
昭和28年に結成された「鎌倉連合婦人同窓会」を出発点に脈々と続いている、女たち自身による教育と福祉の場である。

仏像・彫刻

★著作権により、写真の掲載はできません。

如意輪観音 来迎寺

十一面観音半跏像 慶珊寺(横浜市)

矜羯羅童子立像 称名寺(横浜市)

韋駄天立像 浄智寺

薬師如来坐像 九品寺

不動明王及び二童子立像 称名寺(横浜市)

★著作権により、写真の掲載はできません。

鬼卒立像 円応寺

初江王坐像 円応寺

伽藍神立像 建長寺

北条時頼坐像 建長寺

夢窓疎石座像 瑞泉寺

退耕行勇像 浄妙寺

★著作権により、写真の掲載はできません。

蘭溪道隆坐像 常楽寺

観音菩薩坐像 浄光明寺

水月観音半跏像 東慶寺

地藏菩薩立像 寿福寺

大日如来坐像 宝金剛寺

観音菩薩坐像 浄光明寺

写真展「古都鎌倉へのまなざし」準備から開場、展示終了まで

鎌倉生涯学習センター市民ギャラリーにて 協力: 安田三郎写真を保存する会・CPCの会ほか





安田写真のキーワード検索もできます。



準備完了記念撮影(撮影中村太郎)



受付風景

題字を書いたCPCの会植月さん



談笑



作家永井路子さんご夫妻来館
肖像写真の前で



スクリーン映像でも見られます。



石渡鎌倉市長来館



鎌倉ケーブルテレビの取材



展示片付け中にも駆け込みのお客さんが...



あわただしく片付け



おつかれさま



展示終了後、ロビーで

安田写真整理に取り組んだ日々 「安田三郎写真を保存する会」のメンバー



2002・1・28 大量のプリントを
分類整理



2004・3・29 壁に貼り出して
あるのは「鎌倉市民」表紙写真



「古都鎌倉へのまなざしと思い」
2005・3・14 鎌倉駅地下道「ギャラリー50」で展示





月刊「鎌倉市民」の時代 2005・3・14
鎌倉駅地下道ギャラリー



「鎌倉市民」掲載、横山隆一「鎌倉ユーモア」原画コピーなど



2007・3・7



お茶をどうぞ



暑い夏にも活動 2007・7・11



2007・11・14 写真展追い込み

感想いろいろ

「図書館とともだち・鎌倉」おしらせNo.44 2001. 11. 28



安田三郎さんの写真整理に関する取り組みとTOTOMO

昨年春、「図書館とともだち・鎌倉」では「近代史資料収集室はどんな部屋？」と題してのとしょかん面白ゼミナールを企画しました。その際、ある会員の方から「近代史資料収集室が近世・近代史資料や古写真を収集しているのならば、是非検討してほしい資料があるのだが」というご連絡を受けたのでした。それが現在ご高齢のため自宅療養なさっておられる安田三郎氏の貴重な写真資料でした。秋、当会が橋渡し役となって無事に鎌倉市中央図書館への寄贈が決定しました。以来、近代史資料収集室の平田恵美さんを中心に寄贈写真の整理が続いています。現在一年が経過しました。安田さんの長年のご友人で、ネガとポジの整理に根気よく取り組んでおられるメンバーのお一人にその様子をご報告いただきました。

安田三郎さんのこと

安田三郎さんは、生まれは東京ですが、昭和19年から葉山町堀内に住み、現在に至っています。鎌倉に住まわれたことは一度もないのに、鎌倉人以上に鎌倉を愛し、鎌倉にひたりきった方といえましょう。

大正8年（1919年）生まれで、写真科学を専攻され、富士写真フィルム等に勤務ののち、1950年から1980年まで鎌倉国宝館に勤務して、文化財の撮影や調査、資料整備に従事されました。

一方で氏は、ボランティアとして、「鎌倉を愛する会」や「鎌倉の自然をまもる会」など、多くの市民運動に深くかわり、また鎌倉の横浜国立大学付属小中学校の「史跡めぐりの会」を始め、他団体の委嘱を受けて鎌倉の案内役や講師を引き受けられるなど、献身的な活動を続けられてきました。

そのような活動のかたわら、根っからのカメラマンである氏は、あらゆる被写体に対して鋭いカメラアイを向けて来られました。その集積が膨大な写真資料となって残され、このたび鎌倉市中央図書館に寄贈されたのです。

ジャンルは極めて多岐にわたっています。文化財としては、仏像、彫刻、書画、工芸、遺跡、建築など、景観としては寺社、庭園、町並み、山や崖、切り通しなど、特に昭和30年～40年代の宅造ブーム前後の景観などは貴重です。このほか祭

りなどの行事や風俗、文士たちの肖像写真、また芸術的なポートレートや風景などもあります。

紙焼きプリントの分類とデータ付け、またネガフィルムの整理とポジ化など、あまりに膨大な量のため、これからの作業は長い時間と、ひとりでも多くの人手が必要です。

しかし、作業は知的な推理ゲームに似た面白さを含んでいます。一枚の写真、もしそれが風景ならば、ちょっとした手がかりから場所がわかったときの喜び、また仏像ならば、

鎌倉市民1967年1月号 表紙撮影：安田三郎氏 参考書を何冊も



当たって特定できた時の達成感、それらは体験して初めて得られる楽しみです。安田さんの写真を鑑賞しながら、苦楽併せ持つこの作業を続けるグループに、あなたも参加してみませんか。(Y.O)

☆安田三郎さんの写真整理の会では、作業に参加して下さるボランティアの方を募集しています。お問合せは齊木まで。

「古都鎌倉へのまなざしと思い 安田三郎写真展」が鎌倉駅地下道ギャラリー50で開催されました。

(3月10日～23日 中央図書館近代史資料収集室・安田三郎写真を保存する会共催)

“まなざしと思い”のバトンタッチ

鎌倉市浄明寺在住 井崎寿一

鎌倉地下道ギャラリー50にて開催された、“古都鎌倉へのまなざしと思い—安田三郎写真展—”に足を運んだ。地下道を往く大勢の人が立ち止まり、熱い視線を投げかけていた。そして、私の“まなざし”も安田氏の写真に暫し釘付けとなった。

古都保存法成立(昭和41年)当時の、自然と遺跡、鎌倉の暮らし、開発と保存に向けられた安田氏の“まなざしと思い”の証拠写真の数々は、鎌倉の失われた風景、先人の思いを、実に見事に伝えてくれた。中でも「開発と保存のはざま」の作品群は、圧巻。当時、崩されたやぐら群を遠望する宅造工事の撮影現場で、カメラを構え、シャッターを切られた安田氏の胸中は如何ばかりだったか。

1919年、神田で生まれ、富士写真フイルム技芸課を経て、1950～1980年、鎌倉国宝館で文化財の調査、資料の整理に従事、2002年6月に亡くなられた安田氏は、鎌倉三日会の機関誌として発刊された「鎌倉市民」の表紙(1961.1 12号～1978.11 204号)の写真が撮られ、永井路子氏らとの共著『鎌倉歴史散策』、『鎌倉の美術』、『仏像』等の著作がある。安田氏は、その著書『仏のこころとかたちに触れる 鎌倉み仏へのいざない』の“まえがき”で、「仏像は、美術品として造像されたのではなく礼拝の対象として造頭されたもの。従って、見るというのではなくまず敬虔な気持ちで仏像に接することが必要でしょう」と述べられているように、安田氏もご自分の作品を通じて“大好きな鎌倉の自然、史跡、暮らしの風景に対する熱いまなざしと心の思い”を伝えたいと願っておられたに違いない。それが今回の写真展で成功している。安田氏に面識のなかった私は、『鎌倉み仏へのいざない』の表紙に掲載されている「満光山来迎寺 如意輪観音像」写真が、その表情といい、微笑みといい、そして、その“まなざし”迄もが、安田氏自身に見えてならない。

私は、釈迦堂谷に造成された地域の、平成になって建てられた家に住む。安田氏の写真は、紛れもなくその造成時に、その場所で撮られたものに違はなく、私の“まなざし”は、数枚の写真に奪われ、その造成を見守っていた人達、そして“安田氏の思い”を連想して、衝撃で一瞬くもった。

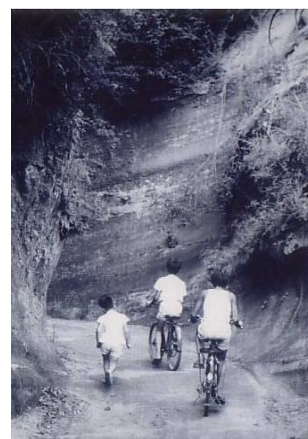
これらの貴重な資料を通して、今後も必ずや鎌倉の自然、歴史的風土の守りを受け継ぐ人達の“まなざしや思い”に繋がっていくに違いない。そして、「鎌倉市民の心にひそむ良識と善意と誠意を探り当て、それを結集する場となり力となる」(雑誌「鎌倉市民」に毎号掲げられた言葉)の思いは、この展示会を通じ「市民の心」を動かしたのではないだろうか。まさに、“まなざしと思い”のバトンタッチ。その担い手に大きな拍手と感謝を奉げたい。地道な作業をコツコツと続け、今回の写真展を実現、成功させてくださった「鎌倉市中央図書館近代史資料収集室」、「安田三郎写真を保存する会」の皆様方、ありがとうございました。

これら安田三郎さんの作品が鎌倉市中央図書館近代史資料収集室へ寄贈されるにあたっては、「図書館とともだち鎌倉」のメンバーが深く関与し、2000年の「保存する会」発足以来、近代史資料収集室の平田恵美さんを中心に、十数名のボランティアの手で、その整理がすすんでいます。そこには、TOTOMOの会員も6～7名参加しています。整理はまだ発展途上で、今回の展示は中間報告的なものでしたが、この写真展は大きな話題となりました。



安田三郎写真展：鎌倉駅地下道ギャラリー50にて

写真提供：鎌倉市中央図書館近代史資料収集室



失われた山崎切り通し(昭和38年) 撮影：安田三郎

漫歩メール・第6号（平成19年11月27日）

老いづく心の扉が開かれる 佐々木紀夫

11月21日（水）・小春日和

鎌倉駅前のギャラリーに入る。安田三郎写真展を見る。安田三郎（平成14年没。83歳）は、鎌倉の自然をカメラに収め続けた人である。130点の展示を見て回る。宅地造成の作品の前で、足が竦む。切り崩された山肌。ブルドーザーの轍が赤茶けた土塊の上を走る。その画像が私の網膜を切り刻む……。心を鎮める。作品から、作者の草木の精への鎮魂の祈りが立ち上ってきた。

次の作品に進む。紙芝居風景が目を引き。大勢の子供が集まっている中に、一人だけ離れて、しょんぼり立っている男の子がいる。お金は持っていない、だが見たい、と逡巡している一瞬の表情を捉えて、シャッターを切っている……。ここには作者の人間観がある。この作品だけではない。彼の視線の向う先にある題材からは、深い思いが溢れ出てくる。

ふと、写真家・春日（いや、「人間・春日」）を私は思い起こした。春日昌明（平成元年没。46歳）は、伝説の写真家である。彼はこつこつと東京の街角風景を撮っていた。その頃、東京オリンピックの開催が近づき、東京の町並みは再開発の浪に襲われていた。古い木造りの家屋は取り壊される。万人が狂喜している中で、彼だけは、覚めていた。彼はどこにでもある、当たり前の日本家屋、その木材という自然素材を生かしていた建築に注目し、撮り続けたのである。

彼はオリンピックが済んだ後の新東京については、美容整形のあとに厚化粧したような都会になった、何かが欠けた、とそっぽを向いてしまう。それ故、彼の東京の旧建築風景の写真は、閉じられた。だが、彼の人生は閉じられなかった。具体的に言うと、オリンピックの頃、一般家庭にテレビが普及しだし、更に人々の心は浮薄一途となったが、彼は、テレビの低俗情報に溺れていく子供達の防波堤になろう、と考えた。そして、その頃は衰微しかかっていた「紙芝居」に目を付け、紙芝居屋になったのである。そんな折しも、彼は急死する。だが、その後、彼がカメラで取り残した作品の意味に、気づく人たちが現れる。昨今は、写真の道を進むアーティスト達から、熱い目で見られている。……

さて、安田三郎も宅地造成後の新築住宅の写真は、一枚も撮っていない。彼は市内の寺院にある仏像に向き合うようになる。伏し目がちの仏像の目に焦点を当てた作品を発表する。そのまなざしは、写真を眺める人の心に住み着く。それは、また安田三郎の心が、私達の心に宿ることに他ならない。このように、本物の芸術家の仕事は、決して閉じられるものでなく、どこまでも開かれて行くものなんだ、と私は感じて会場を後にした。

11月20日（火）

●鎌倉の古写真をこのようにまとめて展示され、あらためて立派な企画であると感じております。老若を問わず、市民であるなしにかかわらず、多くの方々がじっくりご覧になれることを切に期待します。

●珍しい、また古い驚くような写真を沢山見せていただきとても良かったです。ありがとうございました。

●たとえ一枚の記念写真であっても歴史の証言たり得ることを見事に証明している。提供された方お一人に一枚ずつでも180枚、180人。そのスケールに圧倒される。まして安田三郎さん他、写真を写した人たちの写真においてや。これだけいやこれ以上の鎌倉の宝が、どうしてしっかりした一冊の写真集にならないのだろうか。（小田原の見事な写真集を見て下さい）世界なんとかにお金を使うのもいいが、こういう近代資料にも文化都市鎌倉はお金を使ってもらいたい。

●大変貴重な写真を集めた見事な写真展でした。見始め、読み始めたら引き込まれ、2時間以上を要してしまいました。動画時代の現代より遥に心に残る展示会でした。ありがとうございました。

11月21日（水）

●なつかしい写真見せて下さいましてありがとう。

●よき時代の鎌倉がそこにありました。

●中学生の頃勤労働員で汗を流した田畑や我家の写っている防空演習の写真など、たいへんなつかしい思い出をありがとうございました。

●すばらしい写真がいっぱいでした。私の知らない時代がわかりました。後世に伝えてほしい風景が楽しめました。

●仏像の写真がよいですね。笛田在住ですが、開発写真を見て複雑な気持ちになりました。

11月22日（木）

●昔の鎌倉（昭和31年頃）を写真で見ました。私は東京に住んでいましたので、それが見られて大変うれしく思いました。逗子に住み25年になるのですが、今との違いがわかり楽しく見せてもらいました。これから歩いて逗子に帰りますが、海岸線から小坪をまわってながら、今日見た写真と思いきらべてみます。ありがとうございました。

●逗子の昔も知りたいな。それから、今日の写真も見れたら、と思いました。「また見に来たいです。」

●ずいぶん長いこと鎌倉に住んでいます。幼い頃からのなつかしい風景が、今はっきりよみがえる思いで拝見しました。古き良き時代の鎌倉を感慨深く拝見しました。ありがとうございました。

●古き良い時代を思い出しました。私の子供の頃（大正時代・昭和初期）がよみがえりました。

●大町に昭和19年に生まれまして、とにかく懐かしく感激しています。安田先生もよくぞ写真を撮っておいて下さったものです。あまりの開発に、昔に戻れない貴重な写真を感動しました。もっと皆に見せてあげたいと思います。

●このすばらしいコレクションと解説を全部撮影したいと思うほどですが、この催しの記念の図録が出版される可能性はありませんでしょうか。少々高価でも求めてくり返し見たいと思います。本年夏から鎌倉市民となりました。

11月23日（金）

●すばらしいキャプションでより理解が深まりました。

●パソコンに入っている写真データが大量にあって、家のパソコンでもじっくり見れたらいいなと思いました。いずれインターネットで沢山の人に見てもらえるようにしていただけたらうれしいです。

●私は80歳を過ぎました。若い頃から写真を好きでカメラ手離さずに、手当たり次第にシャッターを押して来ましたが、残念なことにセンスが不足しているため、人様の目に見て頂けるものか、自信はありません。でも残してどうするのか頭が働きません。

●プロジェクターの前でおもしろくて長い時を過ごしてしまいました。

●とても上手にとれてて、ぼくもそんなふうにもっとじょうずにとりたいな。

●昔の鎌倉の写真を見て、今とはとてもかわったな！と思った。

●さまざまのことをおもひだす古写真

●鎌倉のみほとけに魅せられて40年余、それ以前の、改めて鎌倉の歴史を還り見ることができました。まなざしが釘づけになりました。これを立案、実行に移されたプロセスを考えると、事務局の方々に頭の下がる思いが致します。お疲れ様でした。

●戦前から夏は鎌倉の海で過ごし戦後は当地に定住するようになりました。昔なつかしい帰源院のわらぶきのお堂、大佛氏や川端氏のくつろいだ散歩姿も思い起こします。よい企画をありがとうございました。

●今さらながら安田先生の想いをこめた作品に感動もし、鎌倉の歴史の記録が後世に伝えられることはすばらしい。可能なら写真集として編集され、使わせていただければ幸いです。

●パソコンの情報がすばらしい！ これをもっと活用できることを希望します。「いい仕事してますね～」

11月24日（土）

●モノトーン自体がなつかしい！ いずれも今日では撮れない写真ばかりで貴重な財産であり、文化財だと思います。

11月25日（日）

●『鎌倉回顧』が出ていらい写真集の出版がない。『続・鎌倉回顧』としての出版を希望する。図書館で色々調査研究がなされているが、その成果を是非市民にも知らせてもらいたい。

●玉石コンコー！？ 恥ずかしき事です。

（肖像写真にあるご自分を謙遜した言葉）

●素晴らしい。そして古き佳き時代を懐かしく感じました。開発の波に洗われて40年余り、今この現状がある。過去から、その「時」の社会を写し撮った写真は貴重です。広く皆んなに観てほしい財産ですね。安田三郎氏の「眼」に感服しました。ありがとうございました。

●14：25入室で時間が足りないと焦りました。余りにも貴重な写真の数々…出逢えた幸運を喜んでいます。見るができなかった人たちの為にお願いします。どうかできるだけ早い機会に（10年後など論外です！！）またこの写真展を企画して下さい。心からお願いします。宅地を造るために木々をバッサリ切った後の写真や海浜ホテルにかのヒットラー（ユーゲント）が来た写真や、南京陥落を大喜びしている写真や、非常に大きな学びの場となりました。多謝！！

終わりに

写真展「古都鎌倉へのまなざし」（鎌倉市中央図書館収蔵写真展）を終えて

中央図書館近代史資料室 平田恵美

この写真展は大きく分けて二つのブロックで構成されていました。一つは、元鎌倉国宝館カメラマン安田三郎氏撮影の写真、もう一つは、主に鎌倉市民の方から提供された古写真によって明治以来の鎌倉の歴史をたどる試みです。

会場となった鎌倉生涯学習センター地下の市民ギャラリーに約550枚の写真が所狭しと展示されました。会期は11月20日（火）から25日（日）まで、毎日午前10時から夕方6時まで（最終日は3時まで）会場を開けて、受付などボランティアの人たちが力いっぱいがんばりました。その結果6日間の来場者数は鎌倉の人を中心に2000人余という盛況ぶりでした。

安田三郎氏は、写真技術を習得し、昭和25年から昭和55年まで鎌倉国宝館のカメラマンとして仏像や古建築はもちろん風景、人物、史跡、行事などを撮り続けました。その一方で仏教美術や歴史をテーマに、数多くの同好サークルを主宰し、歴史散策や勉強会を重ねてきました。会場のあちこちで、今は亡き安田三郎氏との楽しい思い出を懐かしむように、写真の前で人々がさざめいていました。

安田氏撮影の写真は全部で131点展示されていました。

昭和29年に空から和賀江島などを写した航空写真に始まり、古い鎌倉駅や海岸風景、昔の町並みや通りの光景、切通しの風情など見ていくうちにその時代にタイムスリップしていく人も多かったようです。やぐらの中に立つ若い三浦館長と安田三郎氏を見つけて思わず歓声をあげる人。代表作の「流鏑馬」に見入る人。そして昭和40年代に荒々しい爪痕を残した宅地造成の前で深刻な表情を浮かべる人。本当にまだまだ先は長いのに、ここまでじっくり、ゆっくり見て下さる方がなんと多かったことでしょう。そして次のコーナーで、川端康成氏、大佛次郎氏など鎌倉在住の有名文士を見ながら、だんだん同時代に生きてきた身近な鎌倉文化人の若いお顔に巡り会ったとき、何ともうれしい、やわらかな空気が流れていたとか。その時のお気持ちや言葉をもっと直接お聞きしたかったと、残念に思います。

そして如意輪観音をはじめ、山田武二国宝館カメラマンによってプリントされた仏像の写真の前で静かに佇み、またソファに座ってじっと眼を凝らしている人の姿は印象的でした。お寺の方を始め、ゆかりの方のお顔も見えて、わざわざ足を運んで下さったことに感謝しました。

順路はここから中央図書館収蔵写真に進みます。幕末の若宮大路や八幡宮の写真は見たことのある人も多いはずですが、明治期の風景には少なからず驚かされるはずです。いちめんの麦畑や、滑川河口の荒々しい砂丘風景はむしろ新鮮です。海浜ホテルの写真は絵葉書などでよく見かけますが、今回初公開したのは、明治30年代末、ホテルで働く「女中さん」やコックさんの写真です。その中にはドイツの細菌学者コッホ夫妻とともにドイツまで行ってきた地元材木座の若い女性が写っています。鎌倉の女性史の中で特筆すべき人かも知れません。

明治・大正時代初めまでは町の整備、建設、郵便局や商店、銀行の設立などが盛んに行なわれ、町の成長期に入ります。盛んに建てられた別荘のうち、今回初めて、笹目にあった大きな別荘写真も展示しました。

しかし、大正12年の大震災で壊滅的な打撃を受けた町の様子に言葉はなく、最近の中越地震などの光景と重ね合わせて見た人も多いことでしょう。その後鎌倉町は復興し、昭和の初めには平和な一時期を迎えます。浜辺を歩く和洋の服装の女性や子供たち、海の家脱衣場でくつろぐ家族。商店主たちも店を再建し、御用聞きや配達に忙しく働く若い衆たちの生き生きした姿。彼らの着る半纏や作業着は粋な感じがします。

そして昭和9年に始まった鎌倉カーニバルには、ここぞとばかりに大きな張り子を作り、広告に力を入れる企業が集まりました。当時の写真は、よほど写真好きでカメラが買える人でないと撮ることはできません。さいわい長谷の商店の若主人が日常風景やカーニバルを沢山写して残してくれていたのです、今回新しい写真をお見せすることができました。

そんな町場の賑わいと対照的に谷戸の奥には白い細道が走り、草むらの中に鎌倉時代の廃寺の跡など史跡が静かに眠っているのも当時の姿でした。

そして時代は戦争へと向い、今回もっとも提供の多かった、「国防婦人会」や「防空演習」、「出征兵士見送り」の写真が並びます。写真額の数も足りず、ところどころ、グレーのセットペーパーに写真を貼り付けましたが、それも結果として良い効果をもたらし、気楽に見ることができたように思います。

戦争から解放された戦後の空気は、段葛をもんぺ姿でゆったり歩く女の子達と光明寺の鎌倉アカデミア、再び音楽を楽しむ初代鎌倉交響楽団などの写真が象徴していたように思います。そしてにぎやかな復活カーニバル、当時人々を楽しませた映画館、まだ鄙びた風景の残る昭和30年代の各地の写真や子ども達の元気に遊ぶ姿が並びます。最後は昭和40年頃の風呂屋や蔵の写真で明治以来の流れは締めくくられます。

さらに写真提供者の方に感謝の気持ちをこめて一人一枚ずつA5版で写真を帯状に貼り付け、壁に長く掲示しました。額に飾れなかった写真を補充する意味もありました。

ここまで見るとたっぷり二時間はかかります。会場には安田写真の画像検索コーナーとプロジェクターで拡大し、スライドショーをするスクリーンまであり、盛りだくさんの企画でした。

来場者の中には、80歳を越えた方もいらっしゃいましたが、写真の中の風物と懐かしく対話するように見て下さったように思います。

懐かしさで感動し、感謝の気持ちを感想ノートに綴った方々が、これらの過去の写真の中に何を感じ取っていただいたか、鎌倉の持つ文化性とは何かなど、お話ししてみたいと思います。

思えば、25,000コマ以上ある安田三郎撮影写真の中から写真をセレクトし、キャプションを付け、展示写真を作成し、会場で飾り付けるまで、なんと7年の歳月を経ました。

自発的な意志で参加して下さった方々の専門的スキルやねばり強い精神に支えられて今日の日があったことに心から感謝いたします。

(おわり)

★図書館収蔵写真の展示記録は後日、別冊でまとめる予定です。

安田三郎写真を保存する会(これまで作業に係わったメンバー 50音順)

阿曾千代子 入江麻里 榎原等 海老沼順美 大岩千穂子 大河内智子
岡田泰明 片桐紀美子 小関香賀里 斎木まき子 清水恭子 鈴木保美
関根肇 高山典子 鳥井真知子 中村太郎 林真由美 平田恵美 古田さえか
森岡由美子 山下すみ子 渡辺朗 (故)松山範子

作業協力 CPCの会 玉縄古文書の会 伊東雅江 渋谷雅子 田中清の各氏

写真展「古都鎌倉へのまなざし」記録集

発行 鎌倉市中央図書館

鎌倉市御成町20-35

編集 鎌倉市中央図書館近代史資料室

編集協力 安田三郎写真を保存する会

発行日 平成20年7月1日

※令和2年4月 図書館HP掲載